



説教要旨 「また、わたしを裏切るのか」

ルカによる福音書 12章8～12節

「赦されない罪がある」などと言われてると、私たちは不安を感じます。私はその“赦されない罪”を犯してしまっているのではないだろうか、そうであればもはや手遅れなのではないか、と。

ここで“赦されない”と言われているのは、「聖霊を冒瀆する者」(10節)です。ルカによる福音書において聖霊は、言うべきこと、語るべき言葉を教えてくれる存在として見つめられています。そのことは使徒言行録においてより顕著に表れています。ペンテコステの出来事において聖霊が降り、弟子たちは聖霊が語らせるままに、ほかの国々の言葉で話しました。聖霊によって、イエス・キリストによる救いを語る新しい言葉を与えられたのです。そして、この聖霊の働きによって各地に教会が生まれていった様子が、使徒言行録には描かれていくのです。

聖霊は語るべき言葉を与えてくれるのです。しかしその語るべき言葉を、誰にも語らないでいることは、聖霊を冒瀆する行為なのではないでしょうか。それは人々の前で“イエスなどを知らない”と言ってしまう私たちの姿です。自分がイエス様の弟子であることを否み、イエス様との関係を否定してしまうことです。それは神様が差し伸べてくださっている赦しの恵みを、私たちが自ら振り払うようなものであり、それこそが聖霊を冒瀆する行為なのです。

神様が、イエス様を通して私たちに手を差し伸べて下さっているのです。目の前に差し伸べられているこの救いのみ手に、自分からも手を伸ばして握り返すならば、私たちのどのような罪をも赦されるのです。たとえどんなにイエス様や神様の悪口を言ったとしても赦されます。しかし、差し伸べられているその手を振り払うならば、イエス様の十字架の死による赦しを拒み、そんな救いは必要ない、自分には関係ないと宣言するならば、その救いに与ることができないのです。

なにも難しいことはありません。目の前に差し伸べられたイエス様の手を、素直に握り返せばよいだけなのです。ただそれだけで、主が共にいてくださる平安に生きることができるのです。



(2019・7・21 説教者：稲垣真実)